
嫌われているけどアイシテル

一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌われているけどアイシテル

【コード】

N6300X

【作者名】

一夜

【あらすじ】

蓮理は表面上は無表情だが彼のいじめっ子愛姫を女神様のように崇めている。

変態とそれに気付かぬデレなしツンS女の日常。不定期更新です。

すみません、ぬるいですが今後の展開によりタグにR15を付けさせて顶きました。

変態の日常

彼女だ。

朝から彼女は蓮理に会いにやってきてくれた。

後ろを振り向かなくともわかる。

彼女の足あとは一足だけでもすぐに察知できるんだ。

小鳥のように軽やかだからね。

何をするのかな、と思考を巡らせる間もなく彼女は仕掛けた。

蓮理の足に走る鈍痛。

足元の覚束なさ。

視界がぐらりと揺れた。

転ぶのか。

そう思うと同時に、蓮理は傍観的な気分で前のめりにべちゃっと倒れた。

蓮理は眼鏡を食指でクイツと正位置に戻し、傍に立つ人物を見上げた。

その人物は、鈴のように軽やかな笑い声を上げる。

「なあにやってるの?」

彼女は嗤う。転ばせた蓮理に向かって、嗤う。

冬の廊下の冷たさなんか目じゃない。彼女の最高の瞬間を見逃してはならない。

彼女は優越の快楽に、嗜虐の喜びに、蓮理の無様さに、口角を上げる。

その美しさに感嘆と畏敬の念を込めながら、蓮理は彼女を見つめる。

白い肌に、赤い唇に映える、大きな琥珀の宝石。

薄っすらと透き通る琥珀の瞳は、艶やかに輝き投影する。

様々な感情を、濃く深く強く、ありのままを映し出す。

ああ、いい、その目だよその目。

背筋にぞくつ、と走る何か。

それは羞恥心が湧き上がる程の不道德、そして、罪深く背徳的で、倒錯的だ。

同時に胸が高まり、動悸が早くなる。蓮理の頬に赤味が差す。

そのまま彼女の美しさに見惚れた為に、時が止まる。

そんな夢心地の時間に、不意に彼女の瞳に怯えが生じた。

どうしたの、と甘い声を耳元で囁きたくなる。

嫌がる彼女を押さえ付けて、どろどろに甘やかして、猫可愛がりしたくなる。

そんな怯えはいらない。ただ、蓮理を、その光線で、憎しみで焼けて欲しいのだ。

彼女は、嫌悪に僅かながらの怯えを潜めたまま、小さな口を開いた。

「なんであんなたって何しても無表情なの」

虚勢と恐れ。

嫌悪はベースとして依然あるものの、彼女の琥珀には恐れが薄く膜に塗られていた。

恐れなんて感情もいらぬ。

欲しいのは、怒りや嫌悪、軽蔑、憎悪、嘲りなのに。

スクールカースト。

その名の通り、ピラミッド型に積み重なる学校での人間関係の序列。

四十人ばかりのクラスで、その動向を気かけ探り、優越と劣等を交互する。

蓮理もそんなことを気にかける人間の一人だった。

なんのためだと自問すると、「知らん」としか答えられない。

くだらないとか重要だと思ふ以前に、ただ軽んじられることが嫌だった。自尊心だけは高く、常に頂点にいたがった。

それだけの下らない感情の為に、気に入らない奴とも付き合いストレスを抱え込んでいた。

何故、と明確な意味づけを考えたら何もかも嫌になる。勉強も学校も人生もそうだ。

そんなこんなで、蓮理でも入学式の前ではあれこれキャラを考えたのだ。

まだ見ぬ友達との糞つまらない交流を想像しながら。

付かず離れずの関係を保ちつつ、上位の立場に立つ。それを目標に尊敬を集める為の勉強を入学前からせつせと取り組んでいたのだ。そんな可愛らしかった蓮理も、彼女の登場で塗り替えられてしまった。

根本から、妙な性癖と呼べるものまで。

「蓮理ちゃんおはよー!」

隣の席のチャラ男。その声の背後からどつと笑い声が起きる。無視して席につくと、また笑声が上がった。

うぜえ。

湧き上がる殺意。

ゴキブリと馴れ合いなどしたくなかった。取るに足らない存在に気をかける必要はない。必要なのは彼女だけ。

「無視とか感じ悪くない?」

教室の後ろで友達ともに腕を組み横目でこちらを見るのは琥珀の君。

隣の女はもはや引き立て役!

ああ、彼女はなんて! 美しいのだろう!

ああ、琥珀の目が嘲りと嗜虐に包まれているよ!!

こんな視線を浴びることになった原因であるチャラ男にはお礼が
いいいたい!

さっきのゴキブリと評したことを訂正したくなる嬉しさ!

だが、この思いも撤回することになる。

「アイヒメちゃん、ボク泣いちゃうよー」

チャラ男が彼女

愛姫にすぎりつくようなポーズをした。

ああああああああああああ！！！！
てめえ何してんだゴキブリ野郎！！！！

無言の阿鼻をしている間にもチャラ男は愛姫の腹をグリグリと押し付ける。

愛姫は怒りと羞恥を瞳に滲ませ、チャラ男の頭グリから逃れようと腕で頭を叩いた。

そんな交戦を繰り返して、外野は盛り上がる。
てめえら死ね、頼むから愛姫以外は死んでくれ！

「なんか……蓮理ちゃん顔般若じゃね？」

口が大きいためにカバ男と呼ばれる男がのたまった。

しまった！ あまりの忌々しさにポーカーフェイスが崩れた！
チャラ男と愛姫、外野が蓮理の顔を見る。

「ちょっとそれは言いすぎでしょー」

「ひでえよお前最低だな！ せめてクリーチャーぐらいにしてやれ
！」

面白くもない冗談が失笑を買った。

カバ男は取り戻した蓮理のポーカーフェイスを見て焦る。ざまあ。

「今本当にそうなってたんだよ！」

隙を見て愛姫はチャラ男の腕から逃れた。頭を再度ぱしーんと叩くと、股間を蹴り上げた。

「っああ！！！！」

モノを抑え、悶絶するチャラ男。
愛姫グツジョブ！ 蓮理は密かに喝采した。

「うぜえんだよ！ チャラ男ぶってるだけのダサ男のくせに！」

愛姫の顔は真っ赤だ。瞳には恥辱と怒りがキラキラと光っている。

あ・・・いいわ。

不道德な感覚が突き抜ける。

こんな瞳を蓮理にも向けてほしい。

蓮理にとってこの悦楽は愛姫に対してしか感じない。

何をしたら、愛姫はあの感情を込めて蓮理を見てくれるだろうか。
チャラ男に怒ったのは屈辱もあるだろうが、男への免疫なさもあるんだろう。

愛姫は外見は天使だが、今のところ男に縁はない。

寄ってくる男は腐る程いるのだが、本人が近寄らせようとしない。

愛姫が心を許し慕う男は、あの忌わしい愛姫の従兄弟だけだ。

ふつり、と荒ぶる感情。蓮理の心に嫉妬めいた炎が湧き上がった。

これは恋愛などという下卑たものではない、と蓮理は誰かに無言の叫びを上げる。

蓮理はただ、愛姫を崇拜しているのだ。

女神との出会いと再会

蓮理と愛姫の出会いは過去に遡る。

あれは、二人が小学三年生の時だった。

蓮理にとつてはあの頃は比較的純粋だった。

少なくとも、建前上は純粋な気持ちで愛姫を苛めていたのだ。

「やーい！みかんみかん！！」

「愛媛県ー」

そう囃し立てると、幼い日の愛姫は蓮理達をキツと睨んだ。

「えひめじゃないっ！ あいひめ！ なによあんたたちなんかジャ

ガイモみたいな顔じゃないっ！」

「ミカンが喋った！ きもちわりー」

「化けみかんだあっ」

このミカンが喋った、と愛姫をおちよくつたのが蓮理。まだ眼鏡を掛けておらず、女子たちからはやけにモテていた。

愛姫と愛媛の漢字が何やら似て見え、愛姫はミカンと呼ばれからかわれていた。

愛姫はこの時から可愛らしいが気は強く、蓮理達いじめっ子を憎しみの炎で焼き付く勢いで睨んでいた。

蓮理はこの時も表現できぬ悦楽を覚えていたが、言葉にできなかつたし、ただ人を苛める快感に酔いしれているのだと思っていた。

愛姫は女子からも仲間はずれにされるようになり、孤立した。

それでも蓮理を主導とする男子からの暴言に、ぎらつく視線を投

げ返す負けん気の強さは保ち続けていた。

別れは唐突に訪れる。

蓮理は、前にやったように愛姫の宿題の感想文を読みあげてやる
うと思いを巡らしながら、ニヤニヤと愛姫を待ち構えていた。

しかし、チャイムが鳴っても愛姫はやってこない。

先生は少し遅れてやって、開口一番にわざとらしい悲しそうな顔
でこういった。

「以前から決まっていた事なのですが、愛姫ちゃんのお家は、引っ
越してしまいました。皆の悲しそうな顔を見たくないから黙って
いてほしい、ということと今日の今までナイショにしていたの」

えっー、というクラスのどよめき。

その後は先生の話も授業も蓮理の耳には入らなかった。

何故、という疑問と憤慨。

親密だったわけでもないのに、何故か裏切られたような気持ち
がした。

胸に沈む喪失感は際限なく蓮理を襲う。

もう、愛姫には会えないのだろうか。

もし、仲良くしていれば愛姫は教えてくれただろうか。

手紙や、どこにいくのかのまで知らせてくれただろうか。

波のように押し寄せた後悔が蓮理を蝕んだ。

暗澹たる思いを抱え、蓮理は愛姫を忘却した。
小学校を卒業し、中学に入学した。
自分を偽り、くだらぬ友達付き合いをし、女遊びをした。

転機は、父の東京への転勤だった。

泊まりがけで東京の高校に受験しに行き、頭は賢かった蓮理は、
都内の1、2を争う高校へと進学できた。

執着もない故郷と友人、近所の人に別れを告げ、蓮理は東京の高校の門をくぐった。

『入学おめでとっ』と書かれた看板を見て、蓮理はクツと苦笑する。

何もかもくだらなかった。

投げやりな心持で辺りの様子を伺っていると、信じられないものが目に飛び込んできた。

思議する前に、蓮理は足を走らせていた。

胸中で、彼女の名を呼ぶ。

愛姫だった。

幼さは削がれ、更に美しくなったように見えたが、どこか違和感があった。

愛姫の顔を持つ者の制服は、男のものである。

その顔の持ち主は、こちらを見て僅かに微笑む。

「君、新一年生か。何か用かな」

「あ、い、ひ……」

声がうまく出ない。

それをもどかしく思いながら、目で訴える。

愛姫の顔の男はすぐに納得したような顔で、「愛姫の知り合いか？」と蓮理に問う。

こくこく、と頷く。

あの日小学校の先生は愛姫がどこへ引越したのか教えてくれなかった。

愛姫が口止めをした為だ。

ネットで彼女の名前を検索した。関係のないページばかりが出てきた。

金のない蓮理にはそれ以上の手の打ちようがなかった。

それが、偶然という形で彼女の身内らしき奴に会えるなんて。

信じられない心中で愛姫の顔を見つめる。

「俺、海藤騎士。よくあいつに間違えられるけどそんなに似てるか？ あつ、来た」

来たとは、まさか。

騎士と名乗った男の視線の先を見た。

そこには。

「騎士！ もくからかわれるから待つてなくてよかったのに」

少女のきらきらと瑞々しい大きな目が、騎士に注がれている。

瓜二つの彼らに、周りの注目も自然と集まった。

「どうせすぐにバレるだろ？ ここにも君と間違えて僕に話しかけた子が来たんだよ」

「えっ？」

「あ、い、ひめ」

蓮理は呟く。愛姫はその一声で初めて蓮理を見た。

初めは、訝しげに。

蓮理は前髪を上げた。

またたく間に、愛姫の顔が青ざめ、そして。

「お前なんか死んでしまえ」

従姉妹のいきなりの呪詛と悪念深い攻撃性に凍りつく騎士。

蓮理は囚われた。わずかな怯えと、それを覆い尽くす憎悪の琥珀の閃きに。

いや、出会った時から囚われていたのかもしれない。

女神との出会いと再会（2）

なんであいつが東京にいるの。

なんで同じ学校なの。

なんで同じクラスなの。

なんで意外と席が近いの。

悪意ある誰かの巧妙な嫌がらせ？

気持ち悪い。

こじんまりとした質素な自室。

一人の少女が絶え間なき吐き気にクッションへと身を埋める。

こつして悪寒に襲われるのはあいつのせいだ。

嘔吐感に襲われ頭痛に苛まれるのもあいつのせいだ。

あいつは、変わってなかった。

愛姫の名を、途切れ途切れに呼ばれた。

前髪で隠された目と視線を合わせ、あいつだと認識できた。

その正体を知る前から「なんか根暗なオーラを放つ不気味な奴」という印象を抱いたが、まさかあの男だとは思わなかった。

あの不気味な目は相変わらず健在で、一瞬で小学生時代に戻されたようだった。

幼き時も愛姫は感情の伺えないあの底無しの泥沼の目が嫌いだった。

転入生である愛姫に好奇心な視線を送る子たちの中で目立つ無感情な蓮理の目が鼻についた。

なんか気持ち悪い。

それは生理的嫌悪だった。愛姫は蓮理を蔑み、近づきたくないと思っただ。

さぞや皆からも嫌われているだろう、と考えていたのだがクラスを中心となっていた姿に驚いた。

さらに、女子人気も高いと聞く。

なんであんなキモい奴が。

納得がいかずムカついた。

初対面もそうだが、その後も最悪だった。

初めの内はうまくいっていたというのに、あの男が愛姫をからかうようになって変異した。

皆が愛姫を遠巻きにし嫌悪した。

愛姫は悪口を吐かれた。馬鹿にされた。バイキン扱いされた。

この仕打を受けるべきはあの気持ち悪い蓮理なのに、何故自分が？ 不条理と解せない思い、そして何よりも蓮理からの屈辱に愛姫は苦しめられる。

引越しの話が浮き上がって、一時は喜べた。

この苦しい日々から解放されるのだ。

先生もクラスメートに行き先を告げないでくれた。

しかし、逃げた先に安楽などなかった。

眠れない夜が来る度に思い出されるのは、あの時の悔しさと憎悪。

この身を焦がすような負の感情に苛まれることさえも癢に障り、
一層あいつが憎くなる。

あいつを傷つけたい。

恥辱に塗れさせたい。

悪かったと言わせたい。

過去には戻れないことは承知だが、この怨みを晴らさなければこ
の先心から笑っていけないだろう。

愛姫は執念深い自分の性格を自覚していた。

ねっとりとした熟成された怒りは荒ぶり、愛姫を憎しみの炎へと突き
落とす。

あれは愛姫だった。

確かに愛姫だった。

幻ではなかった！ 砂漠のオアシスのように近づいたら消えるとかなんてことはなかった！

蓮理は幸せだ。

意識下に沈めようとしていた女の子をこの目で拝めた。

いずれ、金が貯まれば、興信所に依頼しようと思っていたが。

それが、偶然という形で再会した。

これは運命という名の神の導きではないかと疑わざるをえない。

蓮理の灰色の日常が一変した。

学校に行き愛姫に会うことを考えるだけで至福だ。

糞つまらないはずだった学校が、極楽浄土のように思えた。

「はあああああん幸せだよおおおおおん！！！！ うお f ひ k

h g a g g f j さ j げ f る k

「うるせーよ！」

ダン、と壁を蹴る音。

糞兄貴うぜえ。

蓮理は舌打ちをし、また愛姫に会えるという至福に浸りながら眠った。

蓮理は始発で学校に来ていた。まだ学校は開いていなかったために、校門前で待つ羽目となった。そうなってしまふ事態は予想できていたが、待ちきれなかったのだ。

夢にまで出た愛姫に会える。

やっと教室に入れた。あとは待つだけだった。二時間ほど経ち、続々とクラスメートが入ってきた。

楽しい学校生活！ のはずだが今に限れば女神が未だ現れないがためにもどかしく、拷問のように苦痛だった。

もしや蓮理が嫌で再び転校していつてしまふのではないか。

猫に追い詰められた溝鼠のように蓮理は焦燥し怯えた。

あの時の身を裂かれるようなトラウマが蘇る。

「ねえ斎賀くん」

うづうづとゴリラのように野太い声である。

蓮理は無視した。

「ねえ」

蓮理は無視した。

しばらくすると、そのゴリラは諦めたように席を立ってのそのそと何処かへ行った。

ゴリラは檻に帰れ。

人間である俺は忙しいんだよ、と胸裏で毒を吐く。

辺りを見渡せば、浮つきながらもどこか遠慮がちに距離感を図りながら会話を交わす愚民どもが目に入った。

そして、そこには一人輝く愚民に取り囲まれた女神。

出入り口を見張っていたのに、ゴリラに気を取られていて気付かなかったのだ。

蓮理はゴリラへの怒りが湧き上がるが、それは一瞬で消え去った。女神のほっそりとした体から溢れんばかりの美しさに圧倒された為だ。

ああ、あいつがいる。

愛姫はトモダチとなった千代奈と花梨に笑みを向け、見ていることがバレない程度に彼を視界に入れ様子を見る。

蓮理の目を覆い尽くすような前髪と眼鏡により、表情は伺えない。

「愛姫のカバン重そうだねえ？」

フルメイクでギャルっぽい千代奈が愉快そうに言う。フレンドリーな彼女は最初に愛姫に声を掛けてくれた。

「一週間の教科書全部持ってきたから」

中学とは違い、教科書はロッカーに置いてても良いと許可されている。

愛姫はチマチマと持って行かずに一日辛い思いをしようと思った。

「エッー！ 席に置いてくれば？」

花梨に言われ、愛姫の顔が僅かに歪む。その形相に花梨は自分の言葉に落ち度があつたのかと考えを巡らせた。

花梨は大人しく控えめだが、絶妙なツツコミをしてくれる。しかし人には過度に気を遣う面があるようだ。

愛姫はあの席へ行きたくなかった。

まさか隣という訳ではなかったのだが、蓮理の前の前という席で必然的に蓮理の視界に入らざるを得ない位置だった。

しかし、こうして一生避けている訳にもいかない。

「じゃあ置いてくるね」

「いってらー」

「いってらっしゅい」

千代奈は手を振り、花梨は笑顔の愛姫にほっとした面持ちを見せた。

あの男の横を通って行かなければならない。

嫌な思いに支配されつつも、これは復讐の一打となるかもしれないと愛姫は考え直す。

こんな弱気で消極的ではいけない。

だが、結局は蓮理の横を何も言わず通っただけだった。

カバンを起き、すっかり疲弊した肩を軽くほぐす。

まず、何をしようか。

あの足を踏んづけてやるうか、しかもわざとらしく。
うん、それがいい。

そう思い、再び蓮理の横を通り足を踏んづけてやるうとしたその時だった。

「みかん今も好き？」

ぼそつ、と耳に届いた声。
足が固まった。

ああそうだ。
好物のみかんを食べていれば「ミカンがミカンを食ってる！」とこいつら一味に囃し立てられたんだっけ。
血流が脳内で破裂しそうに巡った。ように感じた。

愛姫は腰を下ろし蓮理の耳元に囁いた。

「死ねよ根暗メガネが」

咄嗟だった為にあまりダメージを食らわせるような言葉ではなかっただろうが、一撃与えてやった。
その優越から愛姫の口は三日月の形へ変わった。

すると、蓮理は急に立ち上がり教室から物凄いスピードで出ていった。

騒々しく消えたので、クラスメートはザワザワと蓮理を噂する。

一方、残された愛姫はぽかんとした。
なんだあいつ。

なんなんだ。

「なに、どーしたの？」

千代奈と花梨が興味深そうに愛姫を見た。

愛姫は「わかんない」と言い返し、輪に戻る。

戸惑いを残しながらも千代奈と花梨と談笑し笑っていた最中に愛姫は気づく。

あいつは暴言に傷ついて走り去ったのだろうか。

そう推測すると、酷く複雑な気分になった。が、昏い喜びも浮き上がる。

もっともっと、苦シメバイイ。

嗜虐の快楽と、胸に刺さる僅かな棘。

この棘は蓮理に対する罪悪感ではない。

愛姫は悪意を持って傷つけようとした。その行為により、自分が汚れたような感覚するのだ。

愛姫は潔癖だった。自尊心は高く負けず嫌いだ、卑劣なことを厭う純情な少女だったのだ。

棘を無視し、愛姫は晒す。

これは復讐と過去に囚われる自分を再生させるため。

この男が苦しんで欲しい。かつての自分のように。

しかし、当の蓮理にとっては口に出せぬほどの快樂砲を撃ちこまれたようなものだった。

そして、長い間愛姫に会えなかったことに耐えた蓮理への最大級のご褒美でもある。

蓮理はダッシュのままトイレの個室へ籠った。

あまりに勢いが良かったので、「うんこ大丈夫かー？」と茶化す声と笑いがトイレを響かせる。

蓮理にはそんなことに構ってられないほど余裕がなく、その言葉は耳に届かなかった。

感情はぼたぼたと流れる。

蓮理の眼鏡を雫が濡らした。

声にも出せない激情が、涙となって溢れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

蓮理は目を瞑り、湧き上る熱情と泣きたくなるほどの最上の喜びを噛み締めた。

後に蓮理は切羽詰まったウンコくん呼ばれ、愛姫の怒りを更に逆なでにするのだった。

悪徳の女神

夢に愛姫が出てきた。

その麗しき姿は、不思議なほどリアルを伴っていた。

とはいえ、蓮理は単純に両手を上げてワッショイはしない。所詮、脳内で創りだされた出来の悪いレプリカである。本物には遠く及ばない。

それどころか、矮小な自分が女神の偶像を生成なんてと慌てた。

ここにはいない本物の愛姫へ詫び言を放ち土下座をする。しかし誠に体は正直だった。蓮理の胸は女神もどきを前にして激しく鼓動していた。

蓮理は鼓動が加速していることに対し弁明をする。これは部屋の空気中の酸素が低下したことによる酸欠状態なのだと。

訳のわからぬ弁明をしている間に、その愛姫もどきは、憤懣を瞳に湛え蓮理を真っ直ぐに打ち抜いていた。

レプリカとはいえ、一点の曇もない純粹な怒りは美しく、そして清らかだ。

ふと、その唇にちゅーしたらどうなるのかという考えが浮かんだ。この愛姫もどきは、どんな反応をしてくれるのだろうか。

やはり、本物に似せたような行動を取るのだろうか。

その琥珀の目を目一杯広げて拳を振り上げ蓮理を憎しみで貫く。そんな幸せのヴィジョンが浮かんだ。蓮理は急かされるように愛姫のレプリカの顎を食指で上げ、唇を近づけ　目が覚めた。

もはや、不敬罪すぎて死ぬしかなかった。

「愛姫って斎賀蓮理をどう思う？ やたら見てる気がするけど、好きなの？」

「はあ？」

その言葉に愛姫は千代奈を凝視した。千代奈は理解したような顔で頷く。あまりに勝手すぎる。

「あたしあいつ嫌いなんだよ」

蓮理への嫌悪の情が自然と表情に表れたようで、花梨はびくりと肩を震わせた。

「あーよかった！ そうだよね！ エリやシンゴたちもなんか根暗でキモイって言ってた！ いつも一人だけど友達いないのかな？ きんもつい！」

「そうそう！ あの目とかオーラが気持ち悪いの！ 存在自体が癩に触るというか不快！ クラスの雰囲気も悪くなるし、まじ自殺してほしいな！」

思っていることがすらすらと口から飛び出る。これ以上言つとド引かれるだろうが、小学生の時とは違いあの男が疎まれている現状への甘美な喜びが愛姫を止めさせなかった。

「愛姫・・・・・・・・齋賀くんに何かされたの？」

花梨が引きつった笑いをする。千代奈も少々引いていた。

「冗談だよ！ あはは！ 本当は蓮理くんもみんなと友達になりた
いけど、内気なんじゃないかなあ？」

実は性悪なアイヒメちゃんと認知されたら三年間腫れ物に触るよ
うに接せられるかもしれない。

愛姫は先ほどの発言をフォローするために心にもない言葉を発し
た。

「ゴリが話しかけたらシカトされたって言ってたよ？ やっぱ性格
悪いよねー」

「ええっ、でももしかしたら内気だからうまく答えられなかったの
かも・・・・・・・・」

「これからいじめられても仕方ないよねー」

花梨の反論を無視し、千代奈がサディスティックに顔を輝かせる。

いじめられても仕方ない。

それは愛姫が過去に言われた言葉だった。

『でも、蓮理くんは皆に親切で好かれてるのよ？』

『あなたにも問題があるかもしれないわ』

『自分から笑顔で話しかけてみなさい。そうすれば仲良くなれるか
』

先生の言葉は、遠まわしに「お前が悪い」「お前に落ち度があった」と言ってるも同然だった。

あたしが悪いの？

あたし、何かした覚えないよ。

いつも関わらないように、話しかけられないように避けていた。

あのぞつとする目と合わせないようにしていた。

ただ、仲良くしないと決めただけだった。

蓮理のように人を苦しませようとした訳ではない。

友達を選ぶことさえも許されなかったのか。

米国の小学校では、いじめられる理由に関わらず加害者が攻められ、何故いじめたのかという問いさえしないという。

悪い行いは責められ、加害者のみ罰せられる。それが正しいと愛姫は思う。

なら、愛姫が蓮理にしたことはいけないことなのか？

愛姫が蓮理に呪詛を吐いたり嫌がらせをしたのは、蓮理が愛姫をいじめたことから起因する。

原因に関わらず、悪行は悪行と考えれば愛姫の行為は「いけない」ことであり、正当化は決してできない。

ならば、悪でいい。愛姫は結論を下した。

悪徳の女神（後書き）

今回は（も？）暗めですがまたおちゃらけます。
愛姫がキーン！となります。

不可解な女神

蓮理は愛姫への謝罪を一万回繰り返して家を出た。二時間以上平身低頭していた故に、遅刻寸前だった。

教室に入ると既に来ていた麗しの女神が蓮理をはっと見た。その表情は普段の憎悪滲むものではない。

蓮理の、今まで見たことがなかった表情だった。

蓮理は目を見開き愛姫を見据えた。距離と眼鏡に加え、蓮理の前髪は目にかかっており、視姦する如きの眼球が愛姫には見えないようになっていいる。愛姫は蓮理が愛姫の視線を認識していることすら気付いていないだろう。

愛姫の、何とも微妙な表情。

不可解。

蓮理が知らない女神の顔色である。それが何を意味しているのか、何を腹の中で思っているのかわからない。

愛姫を解き明かせないことに対するやきもきと切迫感、そして悲しみが湧き上がった。集中するんだ蓮理、と自分を奮い立たせる。しかし感情は冷静な思考を妨げ続け、ついに愛姫はふっと目を逸らしてしまった。

愛姫の抱いていた思いを理解できなかったことに絶望の念を覚えながらも、全く別の種の残念な気持ちが残った。

憎しみの視線とは違った趣きのときめきが胸に余韻を遺した。もっと、見つめてくれてもよかったのに。

歪つであり、引き攣っている。

蓮理は口を開き、声を掛けようとした。先ほどあった苛立ちも吹き飛んだ。言葉は見当たらないが、何かしなければならぬ気分が襲われた。

その瞬時、愛姫はさつと顔を逸らし、もう蓮理の方と向けてくれなかった。

「斎賀くんおはよう。今日は珍しく遅かったね」

いつものようにゴリラが俺に挨拶をする。普段通り蓮理は無視をした。

シカトされたら声掛けないのが普通だろう。嫌がらせか意地か。いずれにせよ、蓮理に応じてやるつもりは一切ない。

「さつき、足引っ掛っけられててドンマイだったよ。気にしない方がいい。でも、あいつら話してたんだけどさ、これから斎賀くんに酷いことするつもりみたいだよ。気をつけて。まったく、高校生にもなって幼稚過ぎるよね」

酷いコトとはなんだい？ と聞き返してくることを期待したような、きもちわるい輝きを瞳に閉じ込めゴリラは蓮理を見上げた。

その表情にカンが触った。ぜってー聞かねーと蓮理は胸に刻む。

酷いコトがどんなのかわからないが、愛姫もそれに参加している

の
だ
ろ
う。
な
ら
ば、
大
歡
喜
で
あ
る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6300x/>

嫌われているけどアイシテル

2012年1月14日01時47分発行